

ア、ギャレー、収納などが、狭い船内に一気に詰め込まれる。小型艇になると、こうした空間利用は極限まで突き詰める必要があり、それは設計者や造船所の腕の見せ所にもなっている。割り切るところは割り切り、こだわりの部分はこだわりを貫き通すという場合が多い。

自動車部品メーカーとしておよそ50年の歴史を持つハッチンズ社は、1970年代初頭、OPディンギーの設計者として知られるクラーク・ミルズと組んで、同社初の小型セーリングボートの販売を企画した。この船は、シッピングの関係で「長さ16ft、幅6ft、高さ5ft」に納めるという枠の中で開発がスタートした。十分な強度と、クルーザーとしての巡航性、実用性を満たすために、ミルズは悩みに悩み、設計に2年を費やしたという。数々の小型ディンギーでヒットを飛ばしたミルズにしても、主要目を制限されながら、クルーザーの要素を満足させるには相当な苦勞があったことがうかがえる。

この最初のモデルは「ザ・コンパクトヨット」



と名付けられ、後の後継艇種にも、その経験と独特のクラシックな雰囲気を引き継がれることになる。

現在のラインナップは、14ftから35ftまでの8艇種。クルーザーシリーズの2艇種(31ftの27/2、37ftの35)以外は、すべてレーザブル艇だ。1本マスト、1枚セールのキャットリグを採用しているのは、「ピクニックキャット」(14ft、1999年6月号で紹介)、「サンキャット」(17ft、2003年8月号で紹介)、そして「ホライゾンキャット」(20ft)の3艇種。その中でホライゾンキャットは、世界中のsmallクルーザーファンから支持を受けているベストセラー・コンパクトでもある。

東京ベイエリアを、海から眺める

東京・夢の島。荒川を下って東京湾に出ると、右手には若洲ゴルフリンクスの緑が広がり、左手には葛西臨海公園、テイズニールンが見渡せる。同じ東京湾でも、工場に囲まれた横浜ベイサイドマリナ付近に比べ、こちらは格段に緑が多く、景色も優しい。天気がいいこともあり、心も晴れる。

そよよと吹く南風の中で、ガフトップを引き上げてセールを展開。船外機を止めてテルトアップすると、ホライゾンキャットは軽快にセーリングを始めた。

「普段は1人でも乗ることが多いですが、セールがちょっと大きいんですよ」

シーラク・ディンギーからホライゾンキャットに乗り換えて1年。オーナーの露崎茂夫さんは、適度なヒールを愉しむようにティラーを握っている。

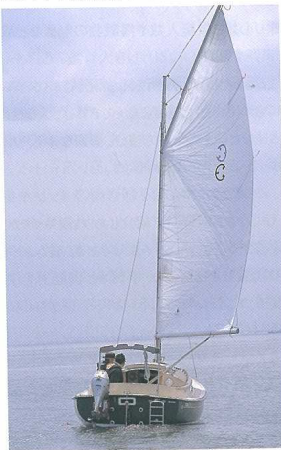
排水量1トンという重めの船体を推し進めるセールは、確かに大きく、パワフルだ。水線長が短いせいか、おどろいた外観に似合わず、ホライゾンキャットは舵に合わせてキビキビと動く。その反面、重めの排水量を利用して、グラグラ揺れることはない。強めの風が入っても、ゆっくりヒールを増やしていくという感じだ。

「この船、原付き感覚で乗れるところが気に入っているんです。フラットマリナに来て、すぐ乗れるのがいいですよ。運河巡りも、よくやりますね」と、露崎さん。

風がなくなってきたところで、露崎さんはセールの畳み、ついでにマストを手際よく折り畳んで、針路をお台場に向けた。

あちこちで埋め立てが行われた東京湾岸エリアは、縦横に水路が走り、ちょっとした迷

左: 軽いブローを受けて、軽快に走る。セミディーキール+センターボードという組み合わせで、風上にもよく上っていく
下: 19㎡のセールは意外に大きい。強風対策としてワンポイントリフが用意されている



路のようになっている。若洲ヨットハーバーから木場の貯木場を抜けて、ビッグサイトへ。水際には、思いのほか公園が多い。

ホライゾンキャットは、セーリング性能もさることながら、9.9馬力船外機によるモーターリング力もなかなかのものだ。オプションでディーゼル船外機も用意されているが、船外機でも力不足は感じない。

いつもの橋をくぐりながら、水路を進んでいくと、やがてレインボーブリッジが目前に現れてきた。「これぞ東京」ともいえるお台場の景色の中で、ホライゾンキャットの持つアメリカの伝統的なスタイリングは違和感なく溶け込んでいる。静かな入江でのアンカリングもいいが、こんな都会の真ん中で一晩過ごすというのも、相当格好のいい大人の遊び方だろう。

「不満なところは、ほとんどありません。ただ、強いて言えば、セールを少し小さくして、レイジージャックを付けたいかな」

露崎さんのいうとおり、がつがつとセーリングする姿よりも、ゆとりを持ったスローな休日を楽しむ方が、この船には似合いそう。ボケツクルーザーとして十分すぎる帆走力を持つだけに、ライフスタイルによっては、パワーダウンも「あり」だろう。

いつもとは違った、海の上から見る東京湾景。ホライゾンキャットの上では、ゆっくり時間が流れていく。



上: マストは、標準装備される「Mastend」 という独自のシステムによって簡単に起倒する。本来はトレラリグ用に考案されたものだが、波さえなれば海上でも問題なく操作できる
左: マストを折り込んだ状態でのエアドラフトは約1.6m。トレラリグを前線にしているキャットリグなので、後ろ方向へのマストの出っ張りも少ない

COM・PAC Horizon Cat

全長: 6.1m
全幅: 2.54m
吃水: 0.66m (CB アップ時) / 1.52m (CB ダウン時)
排水量: 1,130kg
セール面積: 19㎡
価格: 3,850,000円 (船外機別)

(問) ヨットワールド
TEL: 0559-73-1477
<http://www.yachtingworld.jp>



左: 取材時は、オリジナル仕様のステアリングホイールをティラーに変更、またトランスにあったトラベラーも、コクピット中央に移動している
右: デッキ全長。オープンボードやチークのハンドル、ウインチ2つは標準装備。メーカーオプションとして、7馬力ディーゼル船外機、専用ビミニコップ、コクピットクッションが用意されている



左: 取材時(バキューズ)オーナーの露崎茂夫さん/由美さんご夫妻。1年前に購入して以来、月に4~5日はマリナに来るようになったという。「原付き感覚で、気軽に乗れるのがホライゾンキャットのいいところ」(茂夫さん)
中: 同船にあるクォーターバースは、それぞれ長さ2.05m、幅0.7mという余裕のサイズ(写真は左舷側)
右: キャビン内の高さは120cm。38リッターの清水タンク、アイスボックス、ポータブルマリントイレ、シンク2つが標準で装備される

小舟の愉悅

スモールボートクルーザーのシステム